育て親が生みの親の存在を子どもへ伝え続けること
—Open Adoption におけるテリングをめぐる発達支援—

古澤頼雄（中京大学）　富田庸子（鎌倉女子大学）　塚田-城みちる（中京大学）　森和子（文京学院大学）

＜要　旨＞

本研究では、血縁のない幼い子どもをOpen Adoptionによって迎えた育て親が、子どもの発達に伴ってどのようにテリングを行っていくのか、子どもはどのような反応をみせていくのかについて、育て親によるテリング日誌をはじめとする言語的データを用いて解釈的に検討した。その結果、乳児期のテリングが、子どもの理解を期待するというよりは育て親にとっての意味を持っていること、3歳頃と就学頃にテリングの節目を感じる育て親が多いこと、思春期以降のデータ分析はまだ十分ではないものの様々な葛藤が生じる可能性が示され、そこでは育て親たちのネットワークが重要なサポート資源となり得ること、が見出された。今後は様々な角度からの実証的･縦断的な検討を積み重ねて、遺伝的つながりのない親子関係の問題を子ども側から考えていくために必要とされる発達支援システムの構築につなげたい。

＜キーワード＞

Open Adoption　テリング　養子縁組　アイデンティティ　発達支援

【はじめに】

血のつながりのない幼い子どもを迎え育てている非血縁家族において、育て親が子どもに、血縁のある親が別に存在する事実を継続的に伝え続けて子どもの理解を形成していく試みは、テリング（telling）と呼ばれている（環の会、2004）。この試みは、「真実告知」というよりは、むしろ、storytelling（お話し聞かせ、語り聞かせ）に近いものである。すなわちテリングにおいては、生みの親の存在をはじめ子どもの出自にかかわることがらは、ある日突然打ち明けるものではなく、また、一度告げて終わるというものでもなく、日常の中で子どもの成長に応じて伝え続けられるものと認識されている。

近年、欧米の養子縁組のあり方は、大きく変化している。毎年10万人を超える子どもの養子縁組が成立するアメリカにおいても、かつてはClosed Adoption（秘密厳守と匿名性を強調する養子縁組）が主流であった。それが子どものためであり、子どもと育て親との絆を作り上げるために重要だとも考えられていた。しかし、こうした縁組においては、子どもの成長に伴ってさまざまな問題が指摘されることとなった。それは、子どもが自分の生い立ちに感じた疑問が明らかにされなかったり突然に事実を知らされたりすることによって生じる育て親への不信感、「自分は何者か」という問いへの回答が不明確となることから生じるアイデンティティ形成への支障、子どもの「生みの親探し」への対処、さらには病気などに関連した遺伝子

情報を知らないことがもたらす不利益などである。

こうしたことを背景に、アメリカでは、1980年代以降、主として子どもや生みの親のニーズに応え、子どもの最善の利益を最優先させようという流れの中で、Open Adoption が急激に推進されることとなった。Open Adoption は、「育て親と生みの親との間に何らかのコミュニケーションがある養子縁組」（Chapman, at.al.、1987）と定義される。その過程は継続的で、実際のコミュニケーションの程度は三者（生みの親、育て親、子ども）のニーズによって決められていく（桐野ほか、1997）。Open Adoption においては、育て親の生みの親に対する共感が増すこと、子どもが養子であることを理解するのが容易となること、また、Closed Adoption に比べて児童期以降の問題行動が少ないこと、などが報告されてきた（Grotevant, at.al.、1994；Wrobel,at.al.、1996 など）。

日本では、児童相談所をはじめとする機関で扱われる養子縁組のほとんどが Closed Adoption であるが（桐野、1998）、Open Adoption を推進している機関も少数ながら存在している。しかし、Open Adoption という縁組形態や幼い頃からのテリングが、特に日本という血縁意識の強い社会の中で、親子それぞれにどのような影響をもたらしていくかについての実証的検討は、未だ十分ではない。

筆者たちは、テリングといういとなみが、子ども、親、双方にもたらす効果を検討することにより、意識的努力をもって作り出されていく家族が子どもの発達においてどのようにその機能を発揮していくのかを探究したいと考えている。具体的には、育て親が生みの親の存在や子どものルーツにかかわることがらをどのようにテリングしていくのか、それを通じて子どもが親子関係や自己についての理解をどのように築き深めていくのかを、明らかにしようとするものである。この構想は、古澤（1998）の「存在還元モデル」を理論的根拠としている。これは、子どもに起こる「生みの親なくして自己存在はない」という意識をもとに親子関係を考察したものである。個人の自己形成は心理学的な経験の積み重ねによって成り立っていくが、そのプロセスは自己のルーツに関する確認によって支えられているという主張である。

このような問題意識に基づいて、筆者たちは、テリングの効果を仮説的に以下のように想定している。

子どもへの効果

生みの親がいて自分がいる、そして今の家族がある、という存在のつながりを、テリングを通して理解していくことができる。自分のルーツと現在のつながりを明確化することにより、アイデンティティ形成の基盤が獲得される。

育て親への効果

生みの親の存在なくして現在の家族は形成されないこと、つまり、生みの親・子ども・育て親という三者関係こそが自分たちの存在する場であることを、テリングを通して自然に意識化することができる。子どもをひとりの人間として尊重し、そのライフストーリーの形成を支えることが、ジェネラティヴィティ（生成継承性）の実現につながる。

親子関係への効果

嘘偽りや隠し事なく、子どものありのままを受け入れて誠実に向き合おうとする親の態度がテリングを通して子どもに示されることは、

相互間の信頼と尊重に根ざした親子関係の構築につながる。

【方法】

上記のように想定されるテリングの効果を実証していくために、筆者らは、子どもへのテリングを前提としたOpen Adoptionを実践しているNPO「環の会」[1]の協力を得て、全国各地の育て親家族に対して、さまざまな縦断的調査を行っている。また、育て親たちが主催する集いや環の会の様々な活動に可能な限り参加して、育て親の思い、家族の様相を理解するように努めている。具体的には、以下の手続きを実行中である。

1．テリング日誌の作成

日誌形式のテリング記録用紙を作成して全家族に配布し、テリングを行う毎にその内容や子どもの反応、それにまつわる育て親の心理などについて、できるだけ詳細で継続的な記録作成を依頼している。記録用紙の配布・回収は、各家族の記録ペースを尊重しながら、環の会事務局を通じて行う。第1回目の配布は、2004年9月、配布家族数は116家族であった。

2．会員活動場面の参与観察

環の会では、シンポジウム、育て親の集い、育て親希望者に対する説明会、などが行われている。育て親家族が集まるこうした場に参加し、そこで語られるテリングのエピソードや、子ども、親、家族の様子を、筆者たちからの働きかけも含めてフィールド・ノーツに記録していく。デジタルスチールカメラによる画像記録も適宜併用する。本稿の研究費助成期間中（2004年8月～2005年7月）に参加した活動は、シンポジウム2回（8月、11月）、育て親の集い1回（3月）、説明会6回（偶数月）であった。

3．会報の分析

育て親たちの手で2ヶ月に1度発行されている会報には、誕生日を迎えた子どもたちの近況や、新しく親子となった家族の紹介などが掲載され、「我が家のテリング」というコーナーも設けられている。これらの中からテリングにかかわる文章を、データとして採用する。

4．家庭訪問調査

2004年11月1日時点で子どもの年齢が2～4歳の7家族（幼児グループ）と6～8歳の7家族（児童グループ）の協力を得て、半年に1度を基本とする継続的な家庭訪問により以下の調査を行っていく。記録媒体として、DVDへの録画・録音、ボイスレコーダーによる録音、フィールド・ノーツを適宜用いる。

（1）育て親への調査

インタビュー：提出されたテリングエピソードを補足するかたちで、テリングや親子・家族の現状について自由に語ってもらう。

家族イメージ法（FIT）：亀口(2003)のFITを夫婦個別に実施した後、お互いの家族イメージ図を確認しあいながら自由に語ってもらう。

親子関係診断検査（FDT）：東ほか（2002)が親子関係の情緒的側面を重視して作成したFDTの親用質問紙の一部項目を改訂して、親としての態度を「無関心」「養育不安」「夫婦間不一致」「厳しいしつけ」「達成欲求」「基本的受容」という側面から測定する。

（2）幼児グループの子どもへの調査

親子による粘土を用いた自由な造形遊びを実施して、親子の発話・対話や行動を分析し、

[1] 1991年に設立され、2005年5月現在、子どもを迎え育てている家族は125家族である。

親子の関係性を検討する。

（3）児童グループの子どもへの調査

親子関係理解調査：生みの親、育て親、子どもが登場する物語図版（古澤ほか、2004）を用いて、子どもが親子関係をどのように理解しているのかを検討する。

自己理解調査：有能感と受容感の側面から自己理解の様態を捉える刺激図版（古澤ほか、2004）を使用して、子どもの自己理解の様態を把握する。

【本稿の目的】

全ての調査は継続中であるため、本稿では、テリング日誌、参与観察において作成したフィールド・ノーツ、会報に寄稿された育て親の文章、インタビュー、といった既得の言語的データを解釈的に検討し、中間的報告を行う。

富田ほか（2004）では、育て親たちがテリングにおいて考慮しているポイントとして、「生みの親も育て親も共に子どもを大切に思う気持ちを伝え続ける」「テクニックに陥らず、子どもの成長、性格を配慮する」「わかりやすく、嘘をつかず、子どもが話したがる時にはきちんと相手をする」といったことが示された。また、育て親たちは、生みの親を共感的に理解してその存在を否定しないことが、子どもの全てを受け入れる前提であると認識していた。本稿では、育て親がテリングにおいて考慮しているこのようなポイントや生みの親への思いが、子どもの発達に伴って継続的に行われるテリングの中でどのように表現されていくのか、それに対して子どもはどのような反応をみせていくのかを具体的に把握する。テリングが進められていくプロセスは、各家族に固有のものであると同時に、共通点も多く見出されるものと考えられる。子どもの発達に従って変化するテリングの様相を捉え、親や子どもの葛藤、不安、ニーズを明らかにすることにより、Open Adoption における効果的な発達支援システムを構築するための基礎的情報を獲得したい。

【結果・考察】

子どもの発達段階に沿ってデータを時系列に整理し、それぞれの時期におけるテリングの特徴を検討していく。データの使用については環の会の了承を得ており、倫理的配慮による修正を加えた上で、読みやすさを考慮して文章を適宜まとめている。

1．3歳以前

テリングを始める適期について、例えば、里親・養親の支援に関する膨大なノウハウを蓄積してきた家庭養護促進協会（2004）は、早ければ3歳くらいから話し始めているケースがあると述べ、「その頃から就学前は、話を始める最初の時期と言えます」としている。しかし、環の会の場合、育て親の6割近くが、子どもが3歳になる前からテリングを開始している（古澤ほか、2004）。こうした早い時期からのテリングは、どのように行われているのであろうか。具体的なケースから考察していく。

<2ヶ月・男児>[2]

テレビで出産シーンが放送された時、「S君は、2ヶ月前にHママのお腹から生まれてきたんだよ。覚えてるかな。Hママに元気に産んでもらってよかったね。ママとパパのお家に来て

[2] <>内は、日誌作成時点の子どもの年齢と性別を表す。本文中の引用データは、太字ゴシックで、名前はイニシャル（仮名）で表す。

くれてありがとう」と3人で話した。目をじっと見て聞いてくれて、本当にわかっている様子で、「あー、うー」と笑顔を見せてくれた。

＜1歳4ヶ月・男児＞

朝は「N君、おはよう！　Tお母さんも起きたかなあ。Tお母さんにも聞こえるように、元気におはようって言おうか」と声をかける。夜寝る時にも、「Tお母さんもねんねしたかな…」なんて言ってベッドへ。「N、ねんねしようね。Tお母さん、アンパンマン、メロンパンナちゃん、みんな、おやすみなさい」というと、ニターと笑いながら、クネクネクネ。すぐにねんねしてしまう。

この時期のテリングは、入浴時や就寝時など、日常のくつろいだ雰囲気の中で行われ、**「お母さんはお腹が壊れていて、赤ちゃんができなかったんだ。Kくん、お父さんとお母さんのところに来てくれてありがとう。本当に嬉しいよ」**といった語りに代表される内容が多い。また、**「テレビのニュースを見ながら『あ、Sママの（住んでいる）ところ、大雨だって。たいへんだなあ』なんて話しかけています」「産んでくれたお母さんの名前を子守唄がわりに歌い聞かせている」**といったものや、子どもと自分たちとの出会いを描いた絵本を自作して読み聞かせたり、生みの母親の誕生日を祝っている家族もある。**「子どもは言葉では理解できなくてもすべてのことがわかってしまうと思っているので…」**と、子どもの理解する力を信じるからこそテリングしている親もあるが、**「何でも話せるようになるための私の練習のつもり」「まだ今はわからないだろうって思いながらも、まあいうだけ言っておこうって感じで…」**という親のほうがむしろ多く、**「自分に言い聞かせるようにして、まだ何もわからない子どもに語りかけていた」**とふりかえる親もいる。このように、3歳以前のテリングでは、子どもが内容を理解できるかどうかは別として、伝え続けること、口に出すことそのものに、親自身にとってのテリングの意味が見出されている。古澤ほか（2004)では、子どもが3歳になる以前からテリングを開始した育て親のほうが3歳以降に始めた育て親よりもテリングに関わる不安が少ないことが示された。子どもが幼いからこそ、「理解できるだろうか」「傷つけるのではないか」といった気負いや不安が少なく、自分たち親子の出会いや思い、生みの親の存在を、素直に表現しやすいと考えられる。また、**「一緒に住んでいないおじいちゃん、おばあちゃんのことが普通に会話に出てくるのと同じように、生みのお母さんの話が出てくるのも、普通のことだと思っています」**というように、生みの親という大切な存在について、話さないよりは話すことのほうが、自分たちにとっては自然なのだと表現する親もいた。

2．3歳頃から就学前頃まで

子どものことばが発達し、会話が成立するようになってくると、テリングの内容も、より具体的なものになっていく。

＜3歳・女児＞

「あ、今の顔、Tママにそっくり！」といったら、「え？　産んでくれたお母さん？」「そう。すごく似てたよ」…そしたら、鏡の前に行って、自分の顔をこんなして見つめていました。

＜3歳・男児＞

リビングに飾ってある乳児院の写真を手に

とり『ここ、どこにあるの』『（自分を）宝物って思った？』『お風呂でうんちしなかった？』…突然『ここに行きたい』。乳児院と環の会に連絡を入れ、Rを迎えて以来初めての訪問。当時お世話になった保育士さんたちにお話を聞き、お部屋を見せていただいて…。まだ言葉に出して感想を言ったりはしませんが『また行きたい？』と聞くと『うん、行きたい』と返ってきます。

乳児期からテリングを行ってきた親の多くが、3歳を過ぎたあたりにひとつの節目を感じるようである。**「3歳を過ぎる頃から、子どもから尋ねてくることが増えました」「3歳くらいまでは『ん…』と聞いていたけれど、年長ぐらいになると、『ん…会いたいな』とか『どこにいるの』とか…」「いつでもどこでも『ねえ、養子って何？』『産んでくれたお母さんは○○さんだよね』と質問してきます」「周りの（子育てしている）大人に『ねえ、おばちゃん、○○ちゃんは誰に産んでもらったの？』と聞いて回っています」「自分のママが二人居ることは理解しているようですが…。テリングをもう一段階上げなくてはいけない時期にきているようです」**というように、育て親たちは、子どもの示す反応を通じて、それぞれの子どもにあわせたテリングがより一層要求され始めたことを感じている。

子どもの理解については、この段階では、まだ**「どこまで理解してどこまで受け入れられているのだろうという疑問が、親には常にあります」「話してはいるんだけど、わかっているのかなあ、どうなのかなあって思いますね」**というように、手ごたえを感じられずにいるケースが多い。一方で、子どもが示す葛藤に困惑する親の声も報告され始めている。

＜3歳・男児＞

幼稚園から帰ってくるとウンチを漏らしている。おかしい。「どうした？」と聞いたら、「Kは、このおうちにいてもいいの？」と突然泣き出した。ありゃりゃーと思い、手をしっかり握って話を聞く。「パパとママ、いなくならない？」「いなくならないよ。どうして？」「Kには産んだママがいるんだよね。そこに行くの？」「Kが大きくなって会いたくなったら会いに行こうね。でもね、Kをずっと守っていくのはパパとママだよ。ずっと一緒だよ」「ママはお腹が痛くて赤ちゃん産めなかったんでしょ。かわいそうだから、Kは、産んだお母さんには会わない」…こんな会話があったのは、テレビで、施設で暮らす母親に会えない子どもの情景を見た数日後でした。何か不安がよぎったのでしょう。また、日々怒ってばかりいる母をふと省みる言葉でした。わずか3歳の息子に「このおうちにいてもいいの？」といわせたのは私なんだと、とても複雑な思いでした。

自分たち親子の出会いを「運命」と表現する育て親は多いが、この頃の子どもたちの側にはまだ、そのような思いはない。生物学的な親子のつながりを持たないがゆえに、親子として暮らしていくことの意味が、子どもによって時にはシビアに問われる。育て親は、テリングを通して、親としての資質を常に問われ続けていくのではないだろうか。それはさまざまな葛藤を生じさせることではあるが、同時に、親子であることの意味、自分が親であることの意味を再発見する機会にもなり得るはずである。そして、

子どもの中にも、親子である意味を育むいとなみであるといえるだろう。

3．就学の頃から

子どもが事実を受けとめ、子どもなりに理解していることを初めて実感したという親の声は、小学校入学前後に多くみられる。

<6歳・女児>

5歳頃、「その話はもうしないでっ！！」と拒否されたこともあった。（養子縁組について書かれた）絵本を読むのをとても嫌がったこともあった。彼女の中で葛藤する時期だったのかもしれない。その頃はあまりその話はせず、見守ってきたつもり。小学校に入学し、友達に自ら「私には二人お母さんがいてね…」と話し始めた。自分自身にも語りかけているようにも思えた。その頃に事実であることを受け止めることができたのではないでしょうか。

<6歳・男児>

今日、突然、「お父さん、お母さんのところに来てよかった。みんなやさしいから、別のお母さんが連れてきてくれてよかった」と涙を流していた。産んでくれたお母さんがいることを理解し、家族になれたこと、小さいながらもわかっているんだと、すっごくいとおしくなった。

<6歳・女児>

「N（自分）が養子で、産んでくれたお母さんがいるってことわかるよ。それをAちゃんに言ったら、『AはAのお母さんから生まれたんだよ。でもNちゃんは、お母さんがふたりいていいなぁ』って言ったんだよ」と話してくれた。

子どもは、友人関係の広がりの中で、友達との違いにも気づき始める。授業で「誕生」が扱われ、性教育も行われる。「産んでくれたお母さんが別にいる」という事実に加えて、「なぜ育てられなかったのか」「なぜ現在の親のもとに来ることになったのか」といった疑問を、子どもたちが感じ始めるのは必然である。育て親のテリングは、もはや「おとぎ話」を脱却して、生みの親の愛情を代弁したり、つながりを意識化できるような内容が、具体的に語られていく。

<7歳・女児>

「どうして○○さんは、Nを育ててくれなかったの？」と聞くので、「本当は育てたかったのよ」と答えた。Nを大切に思うからこそ必死で産んでくれたこと、でもひとりで育てるのはとてもたいへんだったこと、悩み抜いて、Nの命を守りたい一心で環の会を探し、お母さんたちに託してくれたことを、一生懸命話した。すると、「産んでくれてありがとうって手紙を書きたい」といってくれた。

<7歳・女児>

生みの父親については、私たちにもわからない。知っている範囲のことを話すしかできない。やっぱり不安です。でも、生みのお母さんに会って子どもを託されたとき、『幸せになってくれれば…』といって泣いていらした。その姿を思い出して、その姿をきちんと伝えたい。

<7歳・女児>

髪がきれいだと褒められたと報告する子どもに、「産んでくれたお母さんも長くてきれいな髪だったよ」と答えた。子どもは「ふうん、そうなんだ…」とうなずいていた

一般に、養子縁組において、生みの親は育て親にとっては「忘れてしまいたい存在、完全に縁を切ってしまいたい存在」として語られるこ

とが多い（家庭養護促進協会、1998）。しかし、子どもの問いに向き合い、子どもの存在を無条件に肯定していることを伝えていくテリングでは、生みの親への共感的理解や尊重が不可欠となることを、上記のようなケースは示唆している。育て親たちは、誕生日に**「双子だったから、お母さん、産むの、きっとすごくたいへんだったよ。がんばったんだね」**と生みの母親の苦労を思いやったり、生みの母親がつけた名前に込められた思いを推察したり、**「よかったねえ、こんなに元気に産んでくれて。体は今のお父さんやお母さんにはあげられなかったんだから」**と、子どもの存在を生み出した決断と行動への賛辞を、テリングを通じて表現している。

＜9歳・男児＞

きみたちの頬に産んでくれたひとの面影をみるとき、「よろしくお願いしますね」と言われているような気がする。そういうときは、昨日は叱り方がきつすぎたかなと、すこうし反省したりする。

＜3歳・女児＞

生みの親がいなければ今の私たちの家族はなかったわけですから…。家族ですよね、やっぱり。一緒には住んでいないけれど、家族。その存在をいつも感じている。いつも見られていると思って、子育てしています。そして、いつでも会わせてあげたい。いつ見せても恥ずかしくないMちゃんにしてあげたいと思います。

このように、テリングは、育て親に改めて生みの親の存在を認識させ、子どもとのつながりを再確認させ、生みの親、子ども、育て親という関係性の中に自分たち家族があることを意識化させる効果を持つといえるだろう。

4．思春期のはじまり

1991年に設立された環の会では、成長して思春期を迎える子どもが最近現れ始めた。富田ほか（2003）では、テリングにおいて育て親が感じている不安は、反抗期や思春期に子どもが事実をどのように受けとめていくのかといった点に集中していた。こうした時期の必要なサポートを考えていくためには、今後のデータの蓄積が必須である。現時点でみられるエピソードを紹介しておく。

＜10歳・男児＞

家族で出かけた車の中で兄妹げんかが始まり、「いいかげんに兄妹げんかはやめなさい」というと、「産んでくれたお母さんが違うんだから兄妹じゃない」ときた。すかさず「でも育てた親は一緒だろ」と答えて、何とかその場は収まったが、急な角度からの言い訳に固まってしまった。

＜10歳・女児＞

子どもが大きくなってくると、養子であることを盾に取ることがあるんです。「こんな家、来んかったらよかった！」とかね。ほんまに、涙出ますよ。

＜11歳・男児＞

時々テレビなどで、実は自分は養子だったとか、生みの親との再会とかを目にすると、自分の立場と重ねて、自分の気持ちを話したり涙ぐんだりしています。年齢的に自分の考えを持ち始めて難しい年頃になってきています。

＜16歳・男児＞

テリングしていれば順風満帆というわけではないんですよね。小さい頃から話していれば何の問題も起こらないとつい錯覚してしまう

けれど、社会とのつながりの中で子どもは『どういうことなんだ』と突きつけてくるんですよね。それに対して、その子の状況、性格によって、いろんな対応があるんですよね。

このように、テリングにおける不安や悩みが生じやすい時期に、心強い支えとなるのは、育て親間のネットワークである。環の会では、会のソーシャルワーカーによるフォローアップ体制とともに、育て親同士が悩みを相談しあう関係が自主的に作られている。子どもを迎えた時から育て親は「サポーティング・メンバー」と呼ばれる組織の一員となる。育て親同士の会話の中では、育て親であるからこそ共通する悩みや喜び、そして、血縁の有無に関係なく生じるであろう子育て上の悩みや苦労が、分かち合われている。ある親は、**「具体的な解決策に至らなくても、考えていることを口に出して、同じ育て親に聞いてもらえるだけでココロが少し軽くなる」**と表現している。環の会（2005）には、育て親の集まりに参加した育て親の次のような感想が載せられている。

それぞれの家族の子どもは、そのお家に行く縁があったとどの育て親も感じていると思いますが、それでも、環の会を訪ねるタイミングや年齢によっては隣りに座った育て親のお家の○○ちゃんがウチに来てくれていたのかもしれない…とちょっと仮定してみることで、環の会全体が「大きな家族」のように思えることもあるかと思います。実際、この日の会話も（いつものことながら）「あれー、○○ちゃん、大きくなったね！もうすっかりお兄ちゃんだねえ」とか「えー、＊＊ちゃんは春から小学校なんだ、早いねえ」…まるでお正月に田舎のおじいちゃん・おばあちゃんのお家に集まった兄弟姉妹・従兄弟のようでした。

樂木（2005）は、育て親が活動に積極的に参加し交流を持つことは、育て親を常に子どもを迎えた原点に立ち返らせ、自らが新しい養子縁組の実践者であることの自覚と決意を新たにさせることであると述べている。古澤ほか（1999）は、血縁・非血縁いずれの家族・親子も、それを取り巻く非血縁性の社会の中で生活し、支えあっていること、今や家族・親子はクローズド・システムからオープン・システムへと移行し、多様化していることを指摘している。家族の中の非血縁性を意識的に自覚し受けいれていくことは、家族をとりまく他者との垣根を低くして、支えあい育てあうことへとつながるのではないだろうか。

【おわりに】

子どもの発達とともにテリングがどのように行われていくのか、育て親の記述やインタビュー資料を分析することにより検討した。その結果、①乳児期のテリングが、子どもの理解を期待する以前に、親にとっての意味を持つこと、②３歳頃と就学頃に、テリングの節目を感じる親が多いこと、③思春期以降のデータはまだ十分に蓄積されていないが、さまざまな葛藤が生じる可能性が高く、そこでは育て親たちのネットワークが重要なサポート資源となりうること、が考察された。

今後は、さらに多様な角度から実証的・縦断的研究を積み重ねて、テリングという相互世代的なプロセスによって子どもの断片的なアイデンティティがトータルアイデンティティへと統合されていく過程を検討し、遺伝的つなが

りのない親子関係の問題を子ども側から考えていくために必要とされる発達支援システムの構築につなげたい。

【謝辞】

本研究にご協力いただいた環の会の育て親のみなさまと事務局の方々に、心からお礼申し上げます。また、明治安田こころの健康財団より研究費を助成いただいたことを、深く感謝いたします。

【文献】

東洋・柏木惠子・繁多進・唐澤眞弓　2002　ＦＤＴ親子関係診断検査手引 日本文化科学社

Chapman,C.,Dorner,R.,Silber,K.,and Winterberg,T.S. 1987 Meeting the Needs of the Adoption Triangle Though Open Adoption: The Adoptive Parent. *Child and Adolescent social Work*, 4 (1), 3-12.

Grotevant,H.,McRoy,R.,Elde,C.and Fravel,D. 1994 Adoptive family system dynamics: Variations by level of openness in the adoption. *Family Process*, 33, 125-146.

亀口憲治　2003　家族のイメージ　河出書房新社

家庭養護促進協会　1998　養親希望者に対する意識調査　家庭養護促進協会神戸事務所

家庭養護促進協会　2004　里親が知っておきたい 36 の知識－法律から子育ての悩みまで　家庭養護促進協会神戸事務所

桐野由美子　1998　意識調査を通してみた日本の子どものための養子縁組　その１：当事者と非当事者の比較　関西学院大学社会学部紀要、81、129-141.

桐野由美子・芝野松次郎　1997　米国に於ける乳幼児オープン・アダプションの研究　関西学院大学社会学部紀要、77、161-171.

古澤頼雄　1998　家族関係における親子相互世代性　発達、73、2-11.

古澤頼雄・柏木惠子　1999　開かれた家族の創造－家族の多様化と発達心理学－　日本発達心理学会第 10 回大会発表論文集、85.

古澤頼雄・正木庸子　2004　非血縁家族における子どもへの真実告知－実親サーチに関する発達心理学的検討－　平成 13～15 年度科学研究費補助金（基盤研究(C)(1)）研究成果報告書

樂木章子　2005　血縁なき親子関係をつくるネットワーク－ＮＰＯ法人「環の会」の事例研究－　実験社会心理学研究、第 44 巻第 1 号、15-26.

富田庸子・古澤頼雄・石井富美子・塚田－城みちる　2004　育ての親が生みの親の存在を子どもへ伝え続けること－その二　育ての親によるテリング－　日本発達心理学会第 15 回大会発表論文集、115.

富田庸子・古澤頼雄・石井富美子・塚田－城みちる　2003　養子縁組親子におけるテリングについての一考察　日本心理学会第 67 回大会発表論文集、1144.

環の会　2004　環の会子育てハンドブック　特定非営利活動法人環の会＆サポーターズ

環の会　2005　ＭＮサポーティング環第 60 号

Wrobel,G.,Ayers-Lopez.,Grotevant,H.,McRoy,R.and Friedrick,M. 1996 Openness in adoption and the level of child participation. *Child Development*, 67, 2358-2374.